

古代文字資料館ではパスパ文字でチベット語を記した印章二つ、紙幣一枚を管理している。このパスパ文字であるが、『元史』によると、中統元年(1260)フビライ・ハーン即位のとき、チベット僧パスパに国師の称号を与え蒙古の新しい文字の作成を命じたという。文字ができあがった正確な時期は不明であるが、ともかく文字は成り、至元六年(1269)に全帝国に頒布するよう詔がだされた。その字形よりみて、チベット文字をもとに改良を加え作成したとして大過ない。現存する主な資料としてはモンゴル語を記したものと漢語を記したものがある。その他にチベット語(注1)、チュルク語(注2)、サンスクリット語(注3)を記したものも確認されている。現存する諸資料の年代よりみて、この文字の使用は元朝の滅亡とともにほとんど途絶えたと考えられるけれども、印章や紙幣のチベット語表記などにおいては近代まで用いられることとなった。本稿で紹介するパスパ字チベット語の印章はその形態からみて近代のものと思われる。紙幣は1937年から1959年の間に発行されたものである。







1. 「rgīal(勝利)」印

印面(円形)：直径 14.15mm 全高：44.43mm 重：27.8g 材質：鉄



r  
g  
ī(a)  
l

文字ではない

パスパ文字で rgīal(勝利)とある。最後のは文字ではない。rg のように音節初頭で子音文字が連続する場合の第一番目の r(いわゆる添頭字)の字形はとするのがふつうである。照那斯図1991(『八思巴字和蒙古語文献 II 文献彙集』ILCAA)により元代のパスパ字モンゴル語碑文中のチベット語を見ると、rjě(p. 12, 15行)、rgīa-lun(p.29,16行)、rc ān(p.107,4行及びp.138,18行)、rgīab(p.107,31行)、rbon(p.114,8行)、rgīais(p.114,12行)、rg āl(p.114,14行及びp.138,19行)、rji(p.138,18行)などがある。全てとしておりとする例はない。元代以降の資料の中にはとするものもある。小田玉瑛1999(『シルクロードの印章』京都書院. 102頁)に、r の字形をとするパスパ字チベット語の鉄印がみえる。同書の記述によると16世紀のものであるらしい。読みは付されていない。いま印影によると「rgīal(勝利) bkris(幸福)」と読むことができる。



左：rgīal 右：bkris

また照那斯図2003(「一種從八思巴字脱胎而来的文字」『民族語文』2003年第2期. pp. 56

-58)によると、Dieter Schuh “Grundlagen tibetischer Siegelkunde” (VGH Wissenschaftsverlag, Sankt Augustin, 1981.)に1648年、1698年、1748年と分かる三件の文書がありパスパ字チベット語の印が押されているという。1648年のものは**工**、あとの二件は**丁**であるらしい。rg などの r を**工**で記す習慣も一部にあったことがわかる。

なお、元代のパスパ文字では **ᠢ** と **e** は区別されるが、本印の **ᠢ** は **≡** となっており、**e** と区別がない。これは近代のパスパ字チベット語に広く見られる特徴である。

## 2. 「dbag - · dus (帰順)」印

印面 (方形) : 直径 12.26 × 12.25mm    全高 : 35.61mm    重 : 28.2g    材質 : 鉄



文頭の記号

d

b(a)

ᠩ





·

d

u

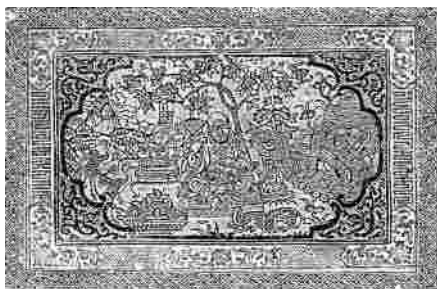
s

句末の記号

左上の  は文頭であることを表す記号で、右下の横一本線  は句末を表す記号。パスパ文字で dbag- · dus (帰順) とある。本印の d の字形は興味深い。先の「rgal(勝利)」印の **ᠢ** の字形と本印の **d** ≡ とは区別がない。d が ≡ である例は Poppe1957 (*The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*, Second Edition translated and edited by J.R.Krueger, Wiesbaden. p.17) が紹介する 20 世紀初めラマ教寺院で使用されたテキストにも見えることから、このような字形も認められていたことがわかる。

## 3. パスパ字チベット語紙幣

紙面 : 117 × 180mm



上 : オモテ 下 : ウラ

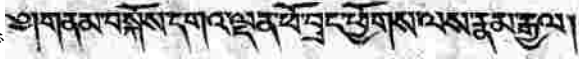



ウラの左

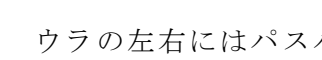
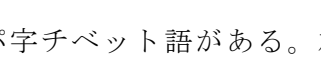























ウラの右

本紙幣は 1937-1959 年の間に印刷発行されたチベットの百両紙幣である(曹剛著『中国西藏地方貨幣』四川民族出版社, 1999 年, 第 169 頁による)。オモテの上段にチベット

文字チベット語で  gnam bskos dg·a ldan pho brang phyogs las rnam rgyal(天の配したる兜率宮、四方に打ち勝つ)とあり、下段には

 chos srid gnyis ldan gyi shog dngul srang brgya tham pa(宗教と政治の合一、紙幣一百両)とある。

ウラの左右にはパスパ字チベット語がある。左に  dg · a ldan  -p' o-brang  i o g s l(a) s r n(a) m r g i(a) l とある。最初の  dg · a ldan(兜率天)-p' o-brang(宮殿)となる。右に  p' o-brang  i o g s l(a) s r n(a) m r g i(a) l とある。p' ōgs(四方)-las(から)-rnam(完全に)-rgīal(打ち勝つ)となる。全体として「兜率宮、四方に打ち勝つ」と読む。字形の特徴は次のとおり。

d  の左側縦線の上は右に傾いており、i  とは区別がある。この点は先に紹介した「dbaŋ · dus(帰順)」印とは異なる。区別のある紙幣の方が正式なもので、区別のない方は地域的な変異であろう。次に、有気音の p' と無気音の b の字形であるけれども、元代のパスパ文字の字形を伝える写本『蒙古字韻』では b は  で、p' は  を変形して  という文字をつくりこれで表記する。この写本ではわずかな曲線で両者を区別するが、元代の碑文では一部を除き(注4)ふつつ両者を区別しない。本紙幣は p' を  で、b を  で表記し両者を明瞭に区別する。この p' は  を変形したものではなくチベット文字の無声有気音を表す文字から直接作ったもので近代のパスパ字チベット語に見られる特徴的な字形となっている。さて、rgīal の r は  であるが、mam の r は  となっており両者相異なる。mam の r を  とすると rn のつながりが ri に近似すると考え、それを避けた結果であるかもしれないがなお検討を要する。次に、brang の r をみると  となっている。そこで br のように音節初頭で子音文字が連続する場合の第二番目の r(いわゆる添足字)の字形を、照那斯図(1991)により元代のパスパ字モンゴル語碑文中のチベット語により確認すると、grub(p. 29, 17行)、dras(p. 114, 9行)、grags(p. 114, 14行)の三例は  で、k' rahs(p. 138, 19行)のみ  となっている。r につき、第一番目(添頭字)を  とし、第二番目(添足字)を  とするのは元代及びそれ以降のチベット文字の正書法に従ったものであるが、それをパスパ文字で記す場合、どのような事情により  がでてくるのか、いま少し例を集めて検討する必要があるだろう。

以上、紙幣の主要部分の文字を確認した。最後に本紙幣のオモテ 2 カ所にあるパスパ文字に触れておく。

一つ目はオモテ右側中央の印影である。先に紹介した曹剛(1999,p168)によると当時の宗教指導者の印章であるという。読みは付されていない。いま印影によると、左は srid- $\bar{li}$ (生死涅槃)、右は dpal- $\cdot$ bar(光華燦爛)と読むことができる。

いま一つはオモテ上下二段のチベット文字部分の背景である。背景に白抜きの小さなパスパ文字が文様として多数配されている。ふつうにはこのような文様に気づくことは困難であるが中村雅之氏のご指摘によりここに紹介することができた。拡大写真により確認すると、パスパ文字で brg $\bar{ia}$ (一百)とあり、本紙幣の単位を表していることがわかる。



左 : srid- $\bar{li}$  右 : dpal- $\cdot$ bar

brg $\bar{ia}$

(注 1)元代のパスパ字チベット語資料としてはパスパ字モンゴル語の中に借用されたものがある以外寡聞にして他に確実な資料のあることを知らない。元代以降の資料の主なものに印章がある。Walsh,E.H.1915(‘Examples of Tibetan seals’ Journal of the Royal Asiatic Society,1915,pp.1-15; ‘Examples of Tibetan seals:Supplementary note’ ,ibid.,pp.465-470.)に多くを掲載する。その他、僅かにパスパ文字を載せる幾つかの版本及び近代の紙幣などがある。

(注 2)松井 太 1998(「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』XIII , pp.1-62.中央ユーラシア学研究会)に収められた二種の印影、Zieme,P.1998(Turkic Fragments in 'Phags-pa Script, 『内陸アジア言語の研究』XIII , pp.63-69.中央ユーラシア学研究会)に収められた「TM191」と「TI」という文書断片などがある。

(注 3)居庸関の西壁と東壁に大きい文字で記されたパスパ文字の刻文がある。注 4 参照。

(注 4)パスパ字漢語資料の「加封孔子制(三)」(羅常培・蔡美彪合編『八思巴字與元代漢語 [資料彙編]』科学出版社. 19591 年. 図版十一)及びパスパ字サンスクリット語資料の「居庸関東壁のパスパ大字刻文」においてb $\bar{a}$ と p $\bar{a}$ は区別される。後者の居庸関刻文でbと p $\bar{a}$ が区別されることについては西田龍雄氏が『居庸関 第一巻』(京都大学工学部. 村田治郎編著. 昭和 32 年刊)の 151 頁で言及している。